

イギリスにおける幼小連携の現状と課題（その1）

ー ロンドンにおける事例調査から ー

高野 牧子 堀井 啓幸

要 旨

「小1プロブレム」という小学校1年生での荒れの状況が世間で広く認知されるようになり、幼小連携の必要性が問われるようになった。これは「接続」に起因する問題でもあり、接続の時期に、子どもの様々な不適応問題が起こっていることを考えると抜本的な改革が求められる課題である。イギリスでは小学校に「レセプションクラス」を設定して、小学校の開始年齢を実質的に下げる形で就学前教育と初等教育を接続させている。そこで、ロンドンで事例調査し、その事例から幼小連携のあり方を考察した。

ロンドンでの事例調査から示唆される点は主に以下の3点である。

- ①小学校開始年齢の低年齢化としての「レセプションクラス」の位置づけ：レセプションクラスは遊び中心で、細かな時間の区切りもない。子どもたちは自分が選んだ遊びを自分がやりたい時間続ける事ができる。
- ②「Year1」の「なだらかな」教育活動：Year1では小グループによる文字の学習なども始まるが、基本的には遊び中心で、子どもに選択権がある。このような状況を続け、2週間を目途に徐々に学習の部分を増やしていく。このように徐々に学習へとつなぎ、「なだらかな」接続が図られていた。
- ③人的条件など支援体制の充実：担任だけではなく、コミュニケーションスタッフや補助教員、幼稚園から加配されたラーニングメンターが子どものことを熟知した専属スタッフとして配属され、大きな環境の変化によって子どもが傷つかないように特別に配慮されている。さらに、幼稚園からは一人ひとりのプロファイルが提供され、情報共有も図られ、一人ひとりの状況に沿った支援体制が十分確立していた。

イギリスの事例調査からみえてきたのは、「幼小連携」が子どもの学びの連続性という視点から「下から上に」向かうベクトルとしての「縦の連携」が明確なことである。今回の調査からは明確にできなかったが、「縦の連携」とともに、学校、家庭、地域社会等のネットワークづくりとしての「横の連携」も今後、検討する必要がある。

キーワード：幼小連携 ロンドン調査 レセプションクラス

I. 「幼小連携」の課題と研究目的

1. 古くて新しい課題としての「幼小連携」

平成20年3月に示された新幼稚園教育要領では、留意事項のなかで、「幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること」と記されている。また同時期に改訂された保育所保育指針においても、保育の計画及び評価のなかで、「小学校との連携」という表記が加えられ、「保育所児童

保育要録」を小学校に送ることが義務づけられた。

幼児教育の歴史からいえば、明治初期の東京女子高等師範学校附属小学校における統合教育での実践や、大正期の倉橋惣三「幼稚園と小学校幼年級の真の連絡」の指摘など、古くから実践が模索され、その必要性が説かれてきた。その点、「幼小連携」はこれまでも、そして現在も多様に論じられる古くて新しい課題といえよう。

とりわけ、今日において「小1プロブレム」という小学校1年生での荒れの状況が世間で広く認知されるようになってからその必要性が言われる

（所 属）

山梨県立大学 人間福祉学部 人間形成学科

ようになった。しかし、幼小連携の課題認識について単に「小1 プロブレム」の問題解決のためと狭くとらえていたのでは、子ども一人ひとりの成長をじっくり見て指導することにはつながらず、問題解決にもつながらず。「連携」は、保育園・幼稚園と小学校、小学校と中学校、中学校と高校というような制度上の「接続」に起因する問題でもあり、接続の時期に、子どもの様々な不適応問題が起こっていることを考えると抜本的な改革が求められる課題なのである。

2. 求められるカリキュラムとしての「連携」

新学習指導要領（平成20年3月告示）では、「連携」や「交流」「関連」「接続」という言葉が少なからず書かれている。「幼（保）小連携」以外にも、特別活動や道徳教育において、小・中・高の連携や一貫性が重視されている。いわゆるカリキュラム上の「連携」である。「連携」の視点は、今回の学習指導要領における最大の変更点であるとする見方もある。

例えば、小学校の学習指導要領（平成20年3月改訂）には、「幼（保）小連携」に関わって、以下のような記述がある（抜粋）。

＜総則＞学校がその目的を達成するため、地域や学校の実態等に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること。また、小学校間、幼稚園や保育所、中学校及び特別支援学校などとの間の連携や交流を図るとともに、障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習や高齢者などとの交流の機会を設けること。

＜国語＞低学年においては、生活科などとの関連を図り、指導の効果を高めるようにすること。特に第1学年においては、幼稚園教育における言葉に関する内容などとの関連を考慮すること。

＜生活＞国語科、音楽科、図画工作科など他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。特に、第1学年入学当初においては、生活科を中心とした合科的な指導を行うなどの工夫をすること。具体的な活動や体験を行うに当たっては、身近な幼児や高齢者、障害のあ

る児童生徒などの多様な人々と触れ合うことができるようにすること。

＜音楽＞低学年においては、生活科などとの関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。特に第1学年においては、幼稚園教育における表現に関する内容などとの関連を考慮すること。

＜図画工作＞上記「音楽」と同様の指摘。

こうした記述は、「発達課題に応じた教育課程の工夫」という教育課程や教育活動の基本に関わる指摘である。しかし、「発達段階に応じた教育課程」とは、学校段階に分かれてある教員免許、それに関わる分断された教員養成や研修（教職課程認定短大・大学の現状からいえば、保育園・幼稚園と小学校、小学校と中学校の間でとぎれることが多い）、子ども一人ひとりの連続する発達を学校段階で区切って見てしまいやすい教師の意識の問題などがあって、実は、幼児期と小学校をつなぐ具体的な方法論に具現化しにくい。

我が国で今日進みつつある幼小連携の実践はおおまかに以下の3点に整理できる¹⁾。

①教育課程に関する幼小連携実践研究

国立大学附属幼稚園・小学校（お茶の水女子大学附属幼稚園、2006）にみられる接続期カリキュラムでの教育内容の連続をはかる実践や生活科を中心に進められてきた幼稚園の保育（5領域）と小学校における教科教育の連続性を図ることを意図した観点での実践研究。

②教師間連携に関する幼小連携実践研究

小学校教師を幼稚園や保育園に派遣する試みや保育記録や幼児に関する記録をデータベース化するソフト開発での幼小連携研究など相互理解を図るための情報共有。小学校教師が「遊びを通して指導する」という幼稚園教育での指導をイメージすることが困難であることから、実践的で効果のある実践研究方法といえる。

③交流による幼小連携実践

運動会や音楽会などの行事での相互参加や招待などでの交流や幼稚園・保育所の年長児が小学校で体験入学を行うなどの交流。

小中連携や小中一貫教育、中高一貫教育に関わ

る先行研究と比べて、就学前教育と義務教育という制度的な区分が明確なために制度区分に関わる接続の研究（articulation）はほとんどない。このうち、③の交流は、幼小連携において数多く実践が行われている。ただし、こうした交流が幼小連携としてどのように位置づき評価できるのか、その教育的意義は見えにくいのが現状である。

3. イギリスの接続教育と本研究の目的

イギリスの就学年齢は5歳だが、2002年教育法によりファウンデーション・ステージ（Foundation Stage: FS）として3.4歳児を対象としたカリキュラムが提言され、①個人的・社会的・感情的発達、②コミュニケーション・言葉、③数理解の発達、④世界の知識と理解、⑤身体の発達、⑥創造性の発達の6領域が掲げられている（FSはこの6領域に下位領域を加えた13の領域における指導指針と幼児の発達度評価の基準となる「Foundation Stage Profile」からなり、2003年9月より施行された）。さらに、近年になってレセプションクラスとして、多くの小学校に4歳児のコースが併設されるようになり、カリキュラムの連続性が推進されている。

そこで、本研究ではイギリスでの「幼小連携」の実態を明らかにするために訪問調査を実施した。

イギリスでは様々な保育形態、たとえば、Private Nursery, Volunteer Nursery, Stats Nursery, 小学校の中に存在するNurseryなどが存在し、各々の機関は、方法や環境、スタッフ等が異なる状況である。4歳児になると、小学校に併設されているレセプションクラスに入学することも多い。しかし、いずれの形態であっても、0歳児から4歳児までについては、2008年9月より施行された発達年齢に沿った学習目標、Early Years Foundation Stage（EYFS）に準拠している。そして、5歳児では小学校に全員就学し、National Curriculumによる教育に移行していくのである。すなわち、学校教育についてはNational Curriculum、就学前教育についてはEYFS（Early Years Foundation Stage）が設定

されており、これは我が国の幼稚園教育要領と文部科学省学習指導要領にそれぞれ対応するものである。

インタビューは2012年9月、EYFSの改訂発表直後に行った。イギリス教育省Barnham氏は、「イギリスでは幼児教育と小学校教育の接続を重視している。具体的には、EYFSの中に69もあった学習目標から、改訂では17項目に精選した。改訂版では、幼児の発達上重要と考えられるコミュニケーション能力と言葉（Communication and Language）、身体的発達（Physical development）および、自己、感情、社会性の発達（Personal, Emotional, Social development）を重点とした。特に、英語の読み、書き、算数に重点を置き、Year1（5～6歳）へより明確に繋がるように考慮した」と述べている。ただ、その一方で、接続の問題点として「今までYear1の先生が、アセスメントで得る子どもの学習状況の情報が、ナショナルカリキュラム上での学習目標と一致せず不明確で合った為、同じ学習から再び始める事が起こりやすかった」と指摘する。

また、子ども一人一人についての発達評価とその情報の受け渡しについては、次のように述べている。

「EYFSでは、乳児から幼児までアセスメントが求められ、教師やthe Early Years Professional（幼児教育の専門家）には、長期的視野でのポートフォリオ（Learning Journey、学習成果のまとめ）の作成義務（責任）がある。たとえば、幼稚園からレセプションクラスに入学する時、教師がこのポートフォリオと一緒に子どもを送り出す事で、レセプションクラスの教員がその子どもを知る手助けとなっている。つまり、子どもに関する情報の全てを統合し、教師が子どもの成長に伴う継続的発達・学習状況を確認し、理解した上で、学習プランを立てる事ができるものであることが理想である」。

ポートフォリオは、1年を通じた教師の観察が基本になり、活動内で気がついた事、アシスタント・ティーチャーからの話や、両親との会話な

ど、周囲から得た情報も含めてまとめていく。これを両親に報告する事で、両親と教育者の対話を促す目的も含まれている。氏は「両親を可能な限り、幼児教育に参加させることは、改訂の争点でもあった」と子どもを中心に教師や保護者との横の連携の重要性も指摘した。

こうした改善施策の動向については紙数に限りがあるため稿を新たに考察する予定であるが、II章で分析するように、訪問したロンドンの公立小学校の事例においても、こうした施策の一端をみることができた。

なお、調査は、下記のようにインタビュー調査2カ所、訪問調査3カ所を実施した。

(1) インタビュー調査

①イギリス教育省におけるインタビュー調査
(Chris Barnham, Patric 他へのインタビュー。
EYFS のアセスメントの担当者であり、主に、
5歳から K1 のナショナルカリキュラムへの移行に際してのアセスメントを専門としている)。
2012年9月11日インタビュー実施

②NFER (National Foundation for Educational Research) での Ms. Caroline Sharp へのインタビュー調査。

2012年9月14日インタビュー実施

(2) 訪問調査

①All Saint's Primary School in Blackheath

2012年9月13日

②Blackheath Montessori Center

2012年9月13日

③All Saints' C of E Primary School in Wimbledon

2012年9月14日

II. イギリス調査における事例分析

本稿では、校長の好意により、写真取材が許された訪問調査①の小学校を主として報告したい。

1. 訪問調査結果

(1) 調査概要

ロンドンの公立小学校は9月が学年の始業であり、正に幼稚園から小学校への移行期間での調査となった。訪問した場所はロンドン南東部、グリ



写真1 学校全景

ニッジに近い比較的治安のよい住宅街が広がる地域である。以下に、調査概要を示す。

- 日時：2012/9/13 (9/6が始業式)
- 場所：All Saint's Primary School in Blackheath (写真1)
- 児童定数 計210名
- 1クラスの児童定員数 30名

この学校にはレセプションクラスとして4歳児の学年があり、さらに Year1 (5歳児) から Year6 (10歳児) まで、全7学年で構成されている。

(2) 教員の構成

- 教師の数 14名 (Job share³⁾ の先生を含む)
- レセプションクラス：担任1名、ラーニングメンター2名、サポートスタッフ2名
- Y1: 担任2名 (Job share) コミュニケーションサポートスタッフ1名
- Y2: 担任1名、補助教員1名、学生1名 (2週間のみの研修生)

幼稚園から小学校への接続期に、感情や行動に問題を抱える児童は、幼稚園からラーニングメンター (Learning Mentor) が付き添い、子どもが環境になれるまで、およそ2週間、その児童に付き添う。調査した小学校では、レセプションクラスに2名の問題を抱える子どもが入学しており、1対1で付き添っていた。発達障がいのある子どもは環境の変化には特に敏感であり、新たな学校環境に慣れるまで、問題行動を起こし続けることが多く、問題となっている。安定した拠り所があれば、混乱せず乗り越えられる可能性も高く、優れた制度であると指摘できる。



写真2 レセプションクラスの室内



写真3 ままごとコーナー



写真4 算数のコーナ

のユニフォームなどが吊るされており、カラフルな楽しい雰囲気である。また、数字の描かれた植木鉢と花の壁面装飾やサッカーユニフォームなど、日常生活にある身近な数字の世界で環境構成されていた（写真2.3.4）。

室外は滑り台や平均台等、大型遊具の他、調査日には大型段ボールの空き箱があった。その他、ホワイトボード、砂場、大工道具、ままごとセット、ボール等があり、Year1の室外へもつながっている（写真5）。この学校は、民家を2軒つないだ変則的な形の校舎で、高い塀に囲まれた敷地の中で、校舎の建物を取り囲むように各クラスの室外のスペースがあり、そこを抜けるとやや広い校庭に出られるようになっている。

② 1日の流れ

朝の集会の後、クラスではまず、黒板の前のカーペットに集まって座り、今日1日の活動の流れを先生が説明した（写真6）。

自由遊び、カーペットタイム、出席確認、讃美歌の練習、テーブルでの学習、遊びの時間、テー



写真5 室外の全景 奥に進むとYear1へとつながる

以下、レセプションクラスからYear2までの各クラスの学習環境、1日の流れ、活動内容をみていく。

(3) レセプションクラス（Reception class）

① 学習環境

室内はカラフルで明るい色調のビニールクロスで覆われた机ごとに、ブロックやお絵描き、動物の模型が置かれ、絵本やままごとのコーナーが設置されていた。天井から緑色の蝶やサッカー選手



写真6 朝の会の様子（カーペットタイム）

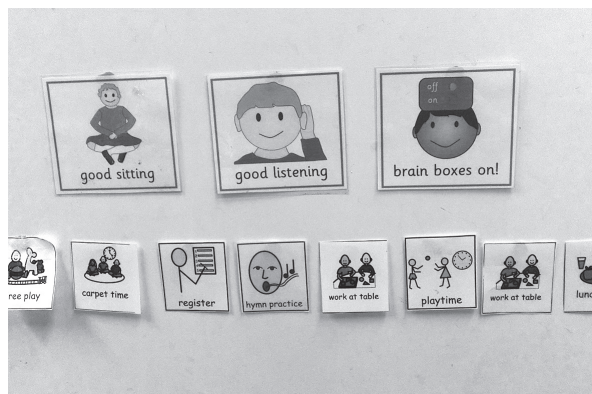


写真7 絵カードで示すクラス目標と流れ

ブルでの学習、昼食、遊びの時間、テーブルでの学習、出席確認、体育、おやつの時間、テーブルでの学習、部屋の整理、ボール遊び、家での時間等、わかりやすい絵カードで示されていた。このカードは、Year2まで同じ絵カードを使用するようにし、継続的に子どもがわかりやすく伝わるよう工夫している（写真7）。

③活動内容

クラス目標は、わかりやすい絵カードで次の3つの目標が示されていた。

- Good Sitting （きちんと座る）
- Good Listening （しっかり聞く）
- Brain Boxes On （脳のスイッチオン）

入学当初の目標として掲げられているこれらの目標は、学習をしていく上での基本となるところである。座っていただけること、話を聞くことができること、そして頭を十分に働かせることは学習態度を養う基本として抑えていると考えられる。

活動は時間を区切らず、子どもたちは与えられた環境の中で自由に活動を選択し、友だちと関わり合いながら、楽しそうに活動を進めていた。細かな時間の区切りもないので、子どもたちは自分が選んだ遊びを自分がやりたい時間続ける事ができる。

活動内容として、室内では数人の男児がブロックを並べる遊びや恐竜の人形で遊び、1人で絵を描く女児もいた（写真8.9）。室外では、1～3名程度の小さな集団で、ままごとやボール遊び、平均台、滑り台など、興味をもったものを次々に遊



写真8 恐竜の模型



写真9 ブロックを並べて遊ぶ



写真10 大型段ボールであそびが展開されていく

んでいた。特に大型段ボールは人気で、中に入ったり、滑り降りたり、5～6人で遊ぶ姿が観察できた（写真10）。途中、興奮した子どもたちが奇声を発し、大騒ぎになると、担任は「周りに迷惑だから」と制するよう言葉かけにきた。それ以外は各活動で子どもたちは自由に取り組んでいた。

このように、レセプションクラスでは子どもが主体となり、時間を区切らず、活動内容も子どもたち自身が選択していた。このような子ども主体の期間を続け、子どもたちが学校に慣れてきた段階で、教師が次第に学習活動を選択していくよう

にしているとのことである。

(4) Year1

①学習環境

室内は、コンピューターコーナーや読書コーナー、造形表現、文字の勉強など、レセプションクラスに比べ、遊び中心から学習へと学習環境も構成されている。

室外にも机があり、水のコーナーや積み木とロッククライミング等、興味に応じて活動できる学習環境である。

②1日の流れ

出席確認、朝会、活動、休み時間、フルーツタイム、活動、フォニックス（Phonics）⁴⁾、昼食、出欠確認、選択、片付け、休み時間、お話の時間、帰宅 という流れである。

レセプションクラスと同様に黒板に絵で描かれているが、活動内容が遊び中心から、徐々に学習面が増えているのがわかる。

③活動内容

Y1では、机に座った活動と、教室外の活動に分かれる。観察した時は、朝会が終わり、午前中の最初の活動の時間であった。

室内の活動は、6人程度の小グループに担任教師1名が文字の書き方を教えていた。文字の練習は少人数で行っており、教師が一人一人の様子をよく観察し、できたところはすぐに褒め、つまづきも丁寧な指導で対応していた（写真11）。

コンピュータで数字の学習をしていた子どもは聴覚に障がいがある様子だったが、画面を見ながら楽しそうに次々に問題に挑戦していた。コミュ



写真11 文字の書き方の練習



写真12 顔を描くコーナー、左側のこちら向きの女性がコミュニケーションスタッフ

ニケーションスタッフが配置されているが、特に彼がコミュニケーションスタッフを必要としない時には、別の活動の指導にあたっていた。その後の休み時間で、中庭で他の子どもたちと関わって遊ぶ際、コミュニケーションに困ると、彼女に通訳を依頼している場面もあり、困ったときにはすぐにサポートする体制になっていた。

そのコミュニケーションスタッフは別の小グループの指導にあたり、鏡を見ながら自分の皮膚の色や目の色、髪の色を見て、自画像を書く活動



写真13 紙皿にきれいな色紙を貼る



写真14 人形の家で遊ぶ



写真 15 大型絵本を楽しむ

を進めていた（写真 12）。その他、紙皿に色紙を貼って飾る活動、人形の家で遊んでいる子ども、絵本コーナーで大型絵本を楽しむ子どもが室内にいた（写真 13.14.15）。

室外では、水遊びの子どもと、動物の模型を動物の種類ごとにまとめ、動物園を作っている子どもたち、積み木とロッククライミングで斜めに橋を渡していく子どもたちの様子などが観察できた。自分たちで活動を工夫し発展・展開していく様子があり、水の性質や立体の傾きなど、遊びながら科学的な力も育てていると感じた（写真



写真 16 水のコーナー



写真 17 積み木とロッククライミング

16.17)。

小グループで活動している子どもたちがほとんどであった。細かな時間の区切りはなく、子ども達が自分で好きな活動を選んで行うことができる。活動の選定については教師が行っているが、その中でどの活動をどのくらいの時間行うかについては子どもたち自身が決めていく。こうした子どもたちの自主性や選択による緩やかな活動は学期初めの 2 週間ほど続き、その後、次第に教師が 1 日のスケジュールを組み、共通の活動を皆ができるように、子どもを環境に慣らしていくということである。

(5) Year2

①学習環境

遊具やコーナーでの遊び道具はなく、机がグループごとに並び、造形的な掲示物もほとんどない学習の場としての教室になっている。その代り、大きな電子黒板があり、教員が問題を PC で出し、クラス全体で共有することができる IC 環境が整っていた（写真 18.19）。



写真 18 Year2 の教室内部

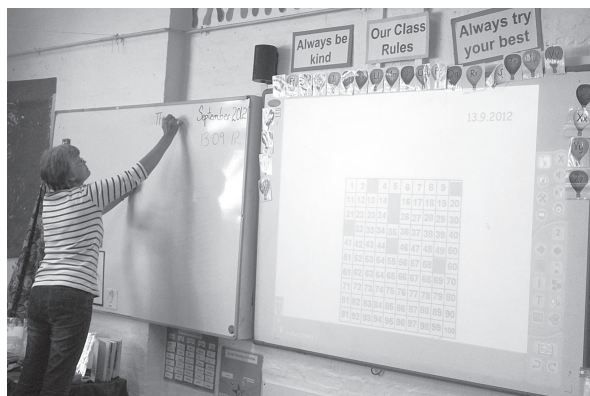


写真 19 右側が電子黒板

②1日の流れ

朝礼の後、算数、休み時間、スナックタイム、リテラシー、読み方、昼食、トピック、休み時間、物語、帰宅というながれであり、Year1と同じように、四角い紙で絵と文字で示されていた。午前中、3活動、午後2活動であり、日本の小学校であれば、午前中4時間、午後2時間の6時間、1時間は45分の時間割になっており、これに比べ、1つの活動時間が長い括りである。Year1とは異なり、子どもが主体的に時間設定するのではなく、学校側が決めた流れに沿う形となる。また、休み時間の後、スナックタイムが設けられているのが日本とは大きく異なる点である。

③活動内容

見学した時間は、算数の時間で、全員室内で、グループごとに机に向かい、座って算数の授業をしていた。課題は100マスに1から100までの数字が書かれており、ところどころ、数字が消えているので、ない数字を埋めていくワークシートであった（写真20）。

子どもたちを大きく3グループに分け、学習進度別に数字が鏡文字などになる、数字が書けない子どものグループ、通常のグループ、算数が得意な子どものグループに分かれ、授業が行われていた。鏡文字に関しては、イギリスで多いディスレキシア（Dyslexia）⁵⁾の兆候が見られるので、特にそのグループにはサブの教員が入り、個別指導も含め、より丁寧に指導していた。一方、進んだ段階にいる児童は、電子黒板で課題が出されており、筆記具やその色などを選択しながら、そこで課題を解いていた。その他のグループの子ともた



写真20 ワークシート



写真21 課題を終えた児童に個別指導



写真22 一斉指導で学習をまとめる

ちはワークシートで問題を解き、できたら、担任に見せ、ノートに貼っていた。担任はそれにコメントを書き、戻している（写真21）。

最後に電子黒板の前のじゅうたんに全員を座らせ、電子黒板で今日のワークシートの課題を出し、答えたい子どもを挙手で指名し、空いているマスを数字で埋めていった。一斉指導でのまとめを経て、休み時間になった（写真22）。

4. イギリスでの接続教育への配慮

Sharp（2012）はレセプションクラスとYear1の子ども70名へインタビュー調査を実施し、子どもたちの話では、Year1後の変化について「遊びや多様性、選択が減り、hard work と‘carpet time’に静かに座っている時間が増えた」とまとめている。

ロンドンでの調査により、レセプションクラスは遊び中心で、時間の区切りもない。子どもたちは自分が選んだ遊びを自分がやりたい時間続ける事ができる。Year1では小グループによる文字の学習なども始まるが、基本的には遊び中心で、子

どもに選択権がある。このような状況が続け、2週間後を目途に徐々に学習の部分を増やしていく。このように徐々に学習へとつなぎ、なだらかな接続が図られている。Sharpの調査のように、確かに遊びや多様性、選択は減ってはいるが、徐々に学習へと移行していく過程があり、接続への配慮が十分に感じられた。

また、担任だけではなく、コミュニケーションスタッフや補助教員、幼稚園から加配されたラーニングメンターの存在は大きい。子どものことを熟知した専属スタッフとして、大きな環境の変化によって子どもが傷つからないように特別に配慮されている。さらに、幼稚園からは一人ひとりのプロフィールが提供され、情報共有も図られている。一人ひとりの状況に沿った支援体制が十分確立している点が重要であると考ええる。

Ⅲ. 子どものための「縦と横の連携」によるなめらかな接続

日本において、なかなか思うように「幼小連携」が進まないのはなぜなのだろうか。いろいろな理由が考えられるが、基本的な問題は、「連携」といった場合、連携や接続、交流のベクトルが、子どもの学びの連続性という視点から「下から上」に向かうべきであるのに、現状ではその逆になっているからであろう。

小学校等で特別支援を必要とする子どもたちが幼稚園や保育園ではそれなりに集団活動についていっているにも関わらず小学校では完全にお荷物扱いされてしまうことが少なくない。こうしたことがないように幼児期の教育と小学校教育の「連携」は、「環境を通して」学ぶという幼稚園の環境構成への配慮を参考にして、小学校においても環境構成の充実を図ることが大切である。それは「縦の連携」といえる。そして、同時に、子どもたちの成長を育む学校、家庭、地域社会等の環境のありかた、ネットワークづくりも検討される必要がある。それは、「横の連携」といえるであろう。

少なくとも、イギリスの実践からは、人的・物的条件の充実を図ることを含めて小学校教育への明確な接続(カリキュラム・アーティキュレーション)

ン)を意識した改革が行われている点で、「縦の連携」の視点が明確であることがみえてきた。これは、今次の学習指導要領改訂が目指すところの連携と指向性は同一である。

今日、子どもを巡る教育環境の変化、子どもの実態、家庭の実態などを考えると、教育における「連携」は、学校(学校段階ごとの役割も含む)、家庭、地域それぞれの教育役割の独自性を認めた上での「共有」が求められる。こうしたいわゆる「横の連携」についての考察は今後の課題としたい。

【注】

- 1) 田中は、近年の幼小連携研究の動向を教育課程、教師間連携、交流以外に、幼小連携の意義や課題に関する研究、発達に関する研究があることを指摘し、多くの研究が「小1プロブレム」と関連させて研究されていることを指摘している。
田中謙「幼小連携研究の動向と今後に関して」山梨県立大学人間福祉学部人間形成学科教育経営(教育環境)研究室『幼小連携を考える視点—交わるとつなぐ—』(平成20年度人間福祉学部・学部研究予算補助研究報告書)、2009年3月、4～6頁に所収
- 2) 根津、安藤は、異業種間接続としての小中一貫校、中高一貫校の先行研究を整理、分析する中で、異業種間の接続の対象を制度とカリキュラムと大別しながらも、カリキュラムの接続を「カリキュラム・アーティキュレーション」と表している。イギリスの事例調査分析の過程で、イギリスの幼小連携の実態は、制度とカリキュラムが融合した「カリキュラム・アーティキュレーション」という言葉が合致するように思われた。
安藤福光・根津朋実「公立小中一貫校の動向にみる『カリキュラム・アーティキュレーション』の課題」日本教育学会『教育学研究』第77巻第2号、2010年6月、53～54頁に所収。
- 3) Job share とは月～水、水～金に区切って勤務するパートタイム教員
- 4) フォニックス(phonics): つづり字と発音の関係を教える
- 5) ディスレキシア(Dyslexia): 学習障害の一つで、知的能力や理解力に問題はないが、文字の読み書きに問題を抱える障害。失読症、難読症、識字障害。

<引用文献・参考文献>

- ・ Department for Education, “Statutory Framework for the Early Years Foundation Stage” (from 1 September 2012)

- ・ “Development Matters in the Early Years Foundation Stage (EYFS)”, Early Education-The British Association for Early Childhood Education-, 2012
- ・ Sue Allingham “Practical Pre-School Books Transitions in the Early Years” MA Education, 2011
- ・ Caroline Sharp (2012) Transition to a formal curriculum in England : perspective from young children, parents and school staff. NFER
- ・ 教育省におけるインタビュー調査（Chris Barnham、Patric 他へのインタビュー。EYFS のアセスメントの担当者であり、主に、5歳から K1 のナショナルカリキュラムへの以降に際してのアセスメントを専門としている）。2012 年 9 月 11 日インタビュー調査
- ・ NFER (National Foundation for Educational Research) におけるインタビュー調査（Ms. Caroline Sharp へのインタビュー。）2012 年 9 月 14 日インタビュー調査。
- ・ 伊藤淑子「イギリス—普遍的かつ的をしぼって—」 椋野美智子・藪長千乃『世界の保育保障—幼保一体改革への示唆—』法律文化社、2012
- ・ 埋橋玲子「イギリス：人的資源のクオリティ・コントロール—実用主義と思考の最先端—」 泉千勢・一見真理子・汐見稔幸『世界の幼児教育・保育改革と学力』明石書店、2008
- ・ 阿部菜穂子『異文化で子どもが育つとき—イギリスの今・日本の未来—』草土文化、2004

本研究は、平成 23 年～平成 25 年度科学研究費助成事業、（学術研究助成基金助成金（基盤研究 C））課題番号 23500698「身体表現による幼小連携カリキュラム構築に関する研究」（代表：高野牧子）による調査研究の一部である。

＊なお、イギリス調査において古川彩香さんにインタビュー調査のテープ起こしも含めて大変お世話になった。お礼申し上げたい。

Present Condition and Task for Preschool/Elementary School Transition in England (Part 1)

— From the London Case Study —

TAKANO Makiko, HORII Hiroyuki

Abstract

The stormy situation for elementary school first graders known as the “1st grader problem” has become widely acknowledged in the world, and the necessity of cooperation between preschools and elementary schools has come into question. There is also an issue originating from “connection,” and the subject of drastic reform is sought when considering the problem of various child maladjustments occurring during the connection period. “Reception classes” have been established in British elementary schools with a substantially lowered starting age that allow connection between preschool education and elementary education. It is there that the London case study was conducted, and from that case study we investigated the method for preschool/elementary school transition.

The London case study mainly implied the following 3 points:

- (1) The placement of “reception classes” that lower the starting age of elementary school: Centered on play, the reception classes have no detailed demarcations of time. Children can continue the diversions chosen by themselves for as long as they want.
- (2) “Gentle” educational activity of the “reception classes”: Items as writing system practice begin at Year 1 with the elementary school group, but the children have options that fundamentally center on play. This type of situation continues, with the goal of increasing the amount of study gradually over 2 weeks. In this way, they are gradually connected to learning, and a “gentle” connection is conceived.
- (3) Substantiation of a support structure for personal conditions: There is not only a homeroom teacher, but communication staff, support teaching staff, and learning mentors added from preschool that are familiar with the children assigned as specialist staff, and are specially considered so as to prevent children from being harmed by the large environmental change. Furthermore, their profiles were all provided by the preschools, information sharing was planned, and a support structure in accordance with each student's situation was established in full.

From the British case study, we observed that, when preschool/elementary school cooperation became a vector, there was a clear view of “vertical continuity” going “upwards” from the perspective of continuity in the children's learning. While not clear from this case study, it is necessary to, along with “vertical continuity,” consider “horizontal continuity” by establishing a network between school, home and the regional community.

Keywords: preschool/elementary school transition, London study, reception class